

## 国語科を中心とした提言（成田 雅樹 先生）

今年度参観した4つの授業の優れていた点と検討を要する点を以下に述べる。市内の他校でも共通に実践したり、検討して改善策を講じたりしていただきたい。

A小学校では、4年生の「一つの花」の授業を拝見した。単元は8時間扱いで、本時は6時間目であった。本時の「課題」は、「なぜ『一つの花』という題名をつけたのだろうか。」であった。単なる「題名読み」を超えて、作者の意図を想定させるメタ的な読みを求める課題であった。題名は、作品のいわゆる「主題」に強く関連するものである。この問いに答えるために読み直す過程で、児童が作品をより深く読むことを期待する授業者の意図が感じられた。授業は、全体で戦時中の状況を振り返り、エピローグ（戦後）との比較に移っていった。比較しやすいように、全文を一枚に収めたプリントが用意されていた。授業者は、相違点だけでなく、戦中戦後の場面に共通点（コスモス）があることに気付かせ、クライマックスでコスモスをわたしたちのお父さんの思いの検討に進めた。ここからが本時の課題に答える活動になった。子どもたちはお父さんの思い（美が価値を持つことができる平和な時代の尊さを感じ、人間らしさを失わずに成長してほしい）に迫ることができた。

以上のように成功した授業であったが、検討したい点がある。1点目は、学習課題についてである。本学級の児童はこの課題で混乱がなかった。しかし、学級の育ち如何では、作者の意図（作品の外）を想定することを要求する本時の課題と、実際の活動（お父さんが一つだけのお花をあげた時の思いの読み取り）とが食い違っていることに混乱する場合が考えられる。「なぜ一つなのか」「なぜ花なのか」を検討することは重要であるが、そのアプローチの仕方に注意が必要である。2点目は、授業展開についてである。授業者は、エピローグとその前の各場面との比較から、共通点である「花（コスモス）」に焦点化するという手順を選んだ。一方、ダイレクトに課題の検討に入る方法もある。課題に答えるには作品本文以外に資料はない。では、どこを読めばいいかということになる。それは、「一つの花」が出てくるクライマックスである。そこに描かれているコスモスの描写を丁寧に解釈していくことによって、本時と同様の読み取りができるだろう。私たちは成功した授業を見た経験があると、ついそれをまねたくなる。無意識に型にとらわれがちになる。授業者もそうだったかどうかは定かではないのだが、妥当な授業は様々である。自らの学級の固有の実態に応じて常に授業展開をアレンジしていくことが大切である。

B小学校では、3年生の「もうすぐ雨に」の授業を拝見した。単元は7時間扱いであった。まず初発の感想（各場面への疑問）を書いたようだ。それから、3～4時間目には3つの場面について、当該場面への初発の疑問から「読みの課題」を立てて、読み深める授業が行われた。3時間目はぼくの人柄を読み、4時間目は信じる気持ちがどのように変化するかを読み、本時5時間目はトラノスケの言いたことが「よく、分かった」理由を読んだ。授業者は、前時の振り返りで、「最後のところになんて書いてあったっけ？」と問い、本時の「よく、分かった」の叙述を取り上げた。また、初発の感想でこの叙述に関する疑問を書いていた子（4人）に挙手をさせた。こうして、本時の「めあて」を子ども自身のめあてにしていた点が秀逸だと感じた。指導案ではその後、さっそく「よく、分かった」理由を話し合うことになっていたが、授業者は1 1 1場面の「ぼくの気持ちが伝わってくる」ところに線を引かせた。ここは本文の起承転結をさらに細分化した9つの場面の中の最後3場面である。授業者には、トラノスケの声が聞こえる以前と以後のぼくの変化に目を向けさせたいという意図と、叙述を踏まえた読み取りにしたいという意図があったようである。授業者はこの後、プリントを配布した。1つ目に「…よく、分かったよ。なぜかという」と、続けて理由を記入する欄と、2つ目に「トラノスケは『ぼく』に、どんなことを言いたかったのでしょうか。」に回答する欄があった。約10分間で各自最初の欄を記入し、その後3分間ペアで話し合い、その後全体への発表が9分程度で行われた。続いて2つめの欄の記入と発表（6人）が行われた。児童の記入内容やその発表は、概ね期待通りであった。「ぼく」の認識の変容（動物にも事情があると信じるようになった）が踏まえられていたが、全員が押さえられていたかどうかはわからない。

本授業について検討したい点は以下の通りである。1点目は、プリントを配布する前の側線引きは必要だったかどうかである。この時点で約19分経過していた。指導案通り、すぐに「めあて」に答える活動に入った方が良かったのではないか。根拠叙述を挙げるのは、プリントに記入する時に留意させるべきだったのではないか。こうして生じる時間の余裕を、全員が「ぼく」の変容を踏まえて問いに答えるために使う必要があったように思う。2点目は、プリントに記入した内容を発表させた際に、児童が言っていないことを授業者が付加して換言したり、児童に気付いてほしい事柄を言ってしまっていたりした。私にも覚えがあるが、時間がなくなることによる焦り、計画通り目標に到達したいという焦りだったのではないか。授業はライブである。時間的に厳しいとなれば、もう1時間授業をしても良かったのではないか。児童に必要な時間なのだから。

C中学校では、3年生の「話し合って提案をまとめよう」の授業を拝見した。単元は4時間計画であり、合意形成のために説得力のある提案をしながら話し合う力を養おうとするものであった。第1時には、問題点を含む話合いの動画を授業者が制作し、生徒に視聴させたという。不十分な点を具体的に知ることは、学習の必要感の喚起に効果がある。さらに、グループで話し合う話題は、第2時「卒業式の合唱曲の決め方」、第3時(本時)「委員会の再編(活動内容の精選)と新委員会の名称」といったように、全生徒に必要感が喚起されるものであった。第4時は全体会議とのことであった。

本時はまず、授業者が「大学入試英語民間試験の見送り」と「東京五輪マラソン札幌開催」の決定過程の不透明さに触れ、話し合うことの大切さを訴えることから始まった。続いて、各自が本時の課題を考える時間が10分間とられた。そして、前回(卒業式の合唱曲決め)の話合いの良し悪しの振り返りが行われた。本時でねらう教科内容である「話し合い方」への意識付けが丁寧であった。生徒の目的意識が、話し合って決定する内容のみに傾かないように、習得すべき言語技能の自覚化にも配慮されていた。さらに授業者は司会の生徒7人を呼び集め、司会の「コツの伝授」とホワイトボードの配布を行った。話合いの成否に関わる司会の注意点をあらかじめ確認し、板書に明示した点が大いに評価できる。その後「保体委員会」と「整・美委員会」の前期後期の活動が記載されたプリントが配布され、「必要性」「負担感」「係や当番その他に任せられるか否か」の視点で2委員会の活動の精選案を考える活動と、精選後の活動内容を踏まえた新委員会の名称検討に移った。この間授業者は机間指導をしつつ、タイムキーパーを務めた。最終的に7グループ中5グループが新委員会名の検討まで達しており、本時はほぼねらいを達成した。

たいへんよく考えられた授業であったが、検討したい点もある。1点目は、板書には「上達ポイント」の一つとして、「説得力のある根拠」が示されていたが、プリントにはそれを記入する枠がなかったことである。根拠と理由まで書いておかなければ、グループの話合いにおいても学級全体の話合いにおいても説得力のある提案をすることはできない。2点目は授業者自身が協議会で語っていたことであるが、意見が対立すると生徒の多くはすぐに他に譲る傾向があると言うことである。合意形成は説得と納得で成立する。得られる合意は個人の案ではない。自分の最初の案が合意と異なるものであったとしても、話合いの過程で納得して最終合意案に与するのだということを指導する必要があると考える。議論が形式的で浅いものにならないために重要なことである。

D中学校では、「竹取物語」の授業を拝見した。単元は8時間扱いであった。1～3時間目で、物語の冒頭と、くらのちの皇子の冒険談を読んだということであった。4～5時間目は、他の貴公子4人と帝について調べる担当を決め、授業者が用意した『角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシックス日本の古典 竹取物語』をもとに調べ学習が行われたようである。6時間目は、石作の皇子と阿倍御主人の発表が行われ、7時間目の本時は、大伴御行、石上麿足、帝の発表を聞き、すべての中で「結婚相手におすすめる貴公子は誰か」という「学習課題」について話し合う授業が展開された。

調べ学習用に、教科書以外に読みやすい資料を用意したことや、自分だったら誰を薦めるかという主体的判断を求めた点で、生徒がしっかり内容を理解する授業が成立していた。それぞれの貴公子について、「かぐや姫からの難題の内容」「どんな手段で入手しようとしたか」「どんなアクシデントがあったか」「かぐや姫の思いはどうだったか」「くらのちの皇子と比較し、どちらがおすすめるか」という調査・発表の視点が共通化されており、比較しやすく工夫されていた。グループの発表には、授業者から補足もあり、グループの模造紙に短冊が加えられた。また、燕の子安貝の「子安貝」の写真や青龍の絵の提示、中臣房子の役職「内侍」の解説などが行われ、生徒の内容理解に効果があった。

ある生徒は、内侍が女官であったことを知ると、「女だから帝が姫の顔を見に行かせたのか!」と感嘆していた。結婚前には男性に顔を見せなかったという当時の習わしに関する知識が先に与えられており、新たに知った事柄(内侍は女)と合わせて、潜在していた疑問への解答が生じた瞬間であった。話し合いの末に、5つのグループのすべてが「石上麿足」を選んだ。理由は、「姫思いである」「家来にも信頼されている」「ずるをしない」「金の力に頼らない」「嘘をつかない」「子安貝を自ら取りに行った」「他人のせいにしらない」「姫の心を動かした」など、内容理解に支えられた妥当なものであった。

しかし、検討しておきたい点もあった。1点目は、姫はだれとも結婚せず昇天することを知っている生徒が、どれだけ「結婚相手としてすすめること」に意義を感じていたかということである。さらに、石上麿足は結局亡くなってしまう。実現しないことをすすめさせることになっていた。2点目は、各グループの調べ学習とその共有は、教科書の学習に加えた発展であったのだが、担当した貴公子以外の内容は、ほぼ説明を聞くだけになったことである。全員に資料(角川文庫)が配布されていなかったことと合わせ、残念なことであった。

以上、率直に述べたため、授業者に失礼な点もあるかもしれないが、授業を授業者個人の問題と捉えるのではなく、学年部・教科部・当日参観者である私等、関係者みんなの課題(自らのこと)と捉えたいからである。ご容赦いただきたい。